
愛知の博物館 No.103



トヨタ博物館

トヨタ博物館は、本館、新館と合わせて世界の車約 160 台を中心に、自動車の誕生以来の歴史を展示しています。本年 1 月より、長年親しんでいた常設展示の見直しに着手しました。世界と日本の自動車産業が絡み合いながら進化してきたさまを、よりわかりやすく伝えていきたいという思いです。

第一段階として、本館、新館の各フロアに分かれて展示されていた外国車と日本車の黎明期から 1950 年代に至る展示内容を本館 2 階に集約しました。

今後も段階的に展示の改装を進め、一部新車両の追加など内容も充実してまいります。

目 次

● 第 40 回東海三県博物館協会研究交流会の報告	2
● 平成 27 年度愛知県博物館等職員研修会の報告	4
● 平成 27 年度部門別研修会の報告	
保存・修復部門研修会	7
教育・普及部門研修会	9

第 40 回東海三県博物館協会研究交流会の報告

平成 27 年 10 月 10 日の東海三県博物館研究交流会の状況を報告します。

本年度の交流会は、美濃和紙の里会館 和紙の里わくわくファーム創造交流館を会場に「地域資源を活用した博物館活動」と題して開催され、三県合計 32 名(内 愛知県 5 名)が参加した。

〈内容〉

- ・あいさつ 13:00 ～ 13:10

岐阜県博物館協会

会長 / 若宮修古館 館長 若宮多門氏

- ・事例発表 13:10 ～ 14:45

「美濃和紙を使った紙文化の発信とユネスコ無形文化遺産登録をめぐる」

美濃和紙の里会館 館長 船戸友数氏

「やきものの産地にある専門館としての 37 年」

愛知県陶磁美術館 学芸員 大長智広

「地域の特性を生かした体験学習 輪中をテーマに郷土・文化・産業の情報発信」

輪中の郷 学芸員 諸戸 靖氏

質疑応答

- ・次回開催県挨拶 14:45 ～ 14:50

三重県博物館協会

会長 / ミキモト真珠島 真珠博物館 館長 松月清郎氏

- ・伝統工芸士による紙すきの実演、展示視察 14:50 ～ 16:00

なお、午前中にオプションとして、希望者に対して紙漉きの体験が行われた。

〈概要〉

「和紙 日本の手漉和紙技術」がユネスコの無形文化遺産登録を受け、美濃和紙の産地である美濃市では伝統産業「美濃和紙」の再生等の試みが行われている。そこで今回は「地域資源を活用した博物館活動」をテーマに、各県から特徴的な取り組みについての事例報告があった。



美濃和紙の里会館 船戸館長

岐阜県の船戸氏からは、美濃和紙を紹介する中心的な施設である「美濃和紙の里会館」について、その成り立ちや紙漉き体験、ユネスコ無形文化遺産の影響と博物館活動などについての発表がなされた。地域資源に関していうと、美濃和紙の里会館が位置する場所は、昔から紙すきがなされていたところである。その理由として、今では流れが変えられてしまったが、かつて流れていた川の存在のために耕作地として発展しなかったことが挙げられるなど、地理的、地形的な観点も踏まえて話があった。また、現在は実際に紙漉き体験をしてもらうことで美濃和紙に興味をもってもらい、美濃和紙の歴史的背景や現状を知ってもらうための試みについても述べられた。

愛知県の大長氏からは、愛知県陶磁美術館の設立の経緯と目的、瀬戸というやきもの的一大産地にあってこれまでにどのような活動をおこなってきたのかについて述べられると同時に十分に地域を意識してこなかったことへの反省、さらには平成25年に「資料館」から「美術館」



愛知県陶磁美術館 大長学芸員

へと名称が変更されたことにともない、資料館を出自とする美術館であることの自覚とこれからの活動のビジョンが企画展「愛知ノート」を例に示された。



輪中の郷 諸戸学芸員

三重県の諸戸氏からは、木曾三川下流域にみられる水防及び治水に関する共同体を有する地域である輪中についての説明と、輪中の代表的地域である長島町の地勢的な特性などについて発表があった。また、こうした地域の特性を生かして、「輪中の郷体験農園」「輪中の郷加工教室」「のりすき体験」などの体験学習を行っており、例えば体験農園では、都市と農村の交流や食の安全と地域の

活性化などを目的して開催するなど、楽しみながら学んでもらうための実践の例が紹介された。

事例発表後には、美濃和紙の里会館で行われている紙漉きの実演を質疑応答を交えて見学した。今年度の東海三県博物館協会研究交流会は、土曜日の開催ということもあり参加人数が少なかったが、地域資源を博物館活動に生かしていくためのヒントを得ることができるよい機会であった。

(大長智広 愛知県陶磁美術館 学芸員 / 愛知県博物館協会 事務局)

平成 27 年度愛知県博物館等職員研修会 「企業系博物館における博物館の理念とその運営について」



研修会場風景

平成 27 年 11 月 11 日 (水)、午後 1 時 30 分より、金城埠頭に設立された「リニア・鉄道館」において平成 27 年度愛知県博物館等職員研修会が開催された。県内より 48 名が参加する盛大な研修会となった。

講師として、企業系博物館の中でも特に私どもの生活に関わりの深い、電力・自動車・鉄道が運営母体となる博物館の館長にご来臨頂き、企業博物館の理念・運営についてご講話賜った。

まずは、「でんきの科学館」の館長である石田芳樹氏より「開館 30 周年を振り返って」と題してお話を頂いた。

明治 22 年 12 月 15 日、設置母体、中部電力株式会社の前身である名古屋電燈会社が名古屋市内の一般家庭へ石炭火力による電力を供給、約 400 燈の電燈が光を放ったという。その発電所があった場所、まさに当地方における「電気の聖地」に、昭和 57 年、電気文化会館の建設が決定され、同 61 年、でんきの科学館が開館した。



同館は「地域文化発展」に寄与すべく でんきの科学館 石田芳樹館長

設立され、運営理念として、「参加型の展示物と参加者体験型の実験」を挙げられた。展示室は「電気の見聞」にはじまる 7 つのテーマで構成され、その展示・体験をとおして、「より楽しみ、感動してもらう」、「深く正確に理解してもらう」、「納得により、共感してもらう」ことを願っている

という。展示構成も常に更新され、時代のニーズに合わせた内容・空間を構築しているが、開館当初から変わらない、守り続けている空間もあるのだそうだ。これは、幼少時に来館した子供が時を経て自分の子連れて再来し、さらに、孫連れて三度訪れる。その際に本人の幼かった頃の記憶を蘇えらせ、懐かしさを感じられる空間としても利用されているのだという。

また、業務に携わる職員相互で意見を出し合って日々改善し、次に繋げていくという、企業の職員ならではの意気込みを伺い、感銘を受けた。そして、背広を脱いで大立ち回りを演じるかの如く熱弁を振るわれた石田館長の姿からも、館長を先頭に館員一丸となって館運営を行い、同時にその活動をとおして、設置母体のPRを十二分に発揮していることが理解できた。また、中部電力株式会社は、同館の他にも発電所がある場所に展示館を併設し、同社の地域への貢献、電力の重要性など、展示施設をとおして発信していることが解った。



トヨタ博物館 布垣直昭館長

続いて、「トヨタ博物館」館長 布垣直昭氏より「企業系博物館における博物館の理念とその運営について」と題するお話を頂戴した。

トヨタ博物館はトヨタ自動車株式会社創立50周年記念事業の一環として、平成元年4月にオープンした博物館で、自動車の誕生から自動車技術・文化の発達の歴史を、実車を主体としてわかりやすく展示をするとともに、歴史的観点から次世代に何を伝えていかなければならないかを訴えかける構成となっている。併せて、「将来の役に立つ博物館」、「人と車の豊かな未来のために作られた博物館」としての役割も担っている。世界中に車を展示する施設は散見するが、多くはプライベート・コレクションで、収蔵車輛すべてが走行可能な状態で保存され、かつ企業が運営する博物館としても貴重な施設である。同社は前述の中部電力株式会社同様、「トヨタ博物館」の他にも、「トヨタ産業技術記念館」、「トヨタ鞍ヶ池記念館」、「豊田佐吉記念館」の展示施設を有し、一部は無料で一般に開放している。

時折、業績不振となった企業が、好成績を挙げ、且つ、有名選手が所属するスポーツ部でさえも廃部を決定するというニュースを聞き、企業のシビアな一面を垣間みることがある。企業にとって、文化・芸術部門への投資はその分野への貢献と企業イメージのPRもあると思われる。ならば、営利を追求する企業にとって博物館運営はそれほど儲かる事業なのだろうか？(←思い切りの愚問…)

布垣館長によれば、同社における企業博物館の評価は「儲ける」ことではなく、「一般社会にどれだけ役に立っているか」に重点をおいているとのことである。また、「博物館(運営)はプライド」であり、そのプライドを節約するわけにはいかないという信念のもとに運営を行っているとのことであった。その時々の上昇・下降に一喜一憂するのではなく、将来を見据え、毎年、木が年輪を重ねるように少しずつ成長を重ねていく「年輪経営」を理念とし、持続的成長を遂げる反面、折に触れ、創業期の原点に返ることが大切だと述べられた。現在でも創業者、豊田佐吉翁

の考え方を成文化した、「上下一致、至誠業務に服し、産業報国の実を拳ぐべし」以下、5条からなる「豊田綱領」は堅く同社で守られ、実践されているとのことである。

また、展示関係のみならず、クラシックカー・フェスティバルや特定の車種を所有する方々を対象にしたオーナーズクラブイベント、さらに、年少者向けの救急車や消防車などいわゆる「はたらく自動車」展など、折にふれて野外イベントを行い、集客をはかる努力も行っていることを挙げられた。

同館は、クルマを保存・展示するだけでなく、歴史的な意味、創造への情熱、文化を語り伝える博物館を目指しており、館のすべてを通じてモノ語る博物館としている。まさに企業の理念・イメージがふんだんに盛り込まれた企業博物館であることが解った。



リニア・鉄道館 天野満宏館長

講演最後は会場提供もしていただいた、「リニア・鉄道館」館長 天野満宏氏の「リニア・鉄道館の理想とその運営」と題するご講話であった。

同館は東海旅客鉄道株式会社（以下：JR 東海）が運営する鉄道博物館で、博物館敷地選定にあたっては、平成 19 年度に名古屋市が計画したモノづくり文化交流拠点構想（金城ふ頭開発）に応じたものである。鉄道への理解、社会への貢献、産業技術の伝承、そして JR 東海の広報

活動を目的に平成 23 年 3 月 14 日にオープンした。研修会開催時直近の集計では、開館以来すでに 333 万人が同館に足を運ばれたという。

同館は同社の資産を産業遺産文化財として捉え、車輛のみならず、工具も併せて展示することにより鉄道事業、また企業の歴史を正確に伝承・公開することを可能としている。

運営面において、タイムリーな情報の発信もするが、温故知新の気持ちをもって、来館者が未来を予感し、希望が芽生えるような気持ちになるような取り組みを行っているとのことである。また、車輛の観賞のみではなく体験型の展示を取り入れ遊び心をもって学べる、「夢と思い出のミュージアム」として、また、来館することによって、社会がどのように変わるかを予感させる取り組みを行っているとのことである。

天野館長の言によれば、先壇のお二方同様、企業にとって博物館は後世に引き継ぐべき施設であり、収益事業ではないとの認識であった。効率的な事業運営を実現させ、かつ、鉄道を理解させることにより、来館者に「鉄道に乗って旅をしたい」と想起させることが大切だと語られた。来館者に旅を連想させることは、即ち鉄道の利用につながり、経営母体である JR 東海のイメージアップ、活用の増加となるとの認識をお持ちになられていた。

そして最後に、リピーター確保に向けた種々の施策展開の実例を紹介いただくとともに、「企画展の定期開催は博物館が元気な証拠だ」との言葉は、まさに当を得たものと感じた。

各館長の講話を終え、休憩の後、午後 3 時 40 分より、リニア・鉄道館 係長 伊藤達也氏に



展示解説風景

よる展示解説が行われ、午後4時40分、散会の運びに至った。

私は自他ともに認める超ネガティブ思考な人間である。そのネガティブ加減は他の追随を許さぬモノと自信をもって言えるほどである。が… 今回の研修会に参加して、企業が運営する博物館職員のポジティブな思考と行動力に驚かされた。それは失敗を恐れず、常に過去を振り返りながらも前を見据えていること

にあると思われた。そして、常に時流に先んずること、また、遙か前を歩むのではなく時流の一手手前を進むこと。さまざまなことを学ばせていただけたと感じた有意義な研修会であった。

最後になりましたが、会場提供を賜りました「リニア・鉄道館」の館長さまをはじめ、ご助力いただきました職員の皆さま、そして、ご多忙中、ご講話賜りました皆さま、そしてご参加いただきました皆さまに、この場を拝借致しまして、御礼言上申し上げます。

(熱田神宮宝物館 学芸員 内田 雅之)

平成 27 年度 愛知県博物館協会 保存・修復部門研修会 「デジタルカメラによる文化財写真制作の基本と工夫」

平成 27 年 12 月 12 日 (土)、名古屋市博物館において保存・修復部門研修会を実施した。今年度の研修会のテーマは「デジタルカメラによる文化財写真制作の基本と工夫」とし、講師として国立歴史民俗博物館 管理部博物館事業課 勝田徹氏、名古屋市博物館 学芸課 杉浦秀昭氏に御来臨を賜り、当日は 40 名が参加した。両講師からは、前半に文化財写真についてのご講演いただき、後半には実際にカメラを用いて撮影方法をご教示いただいた。

講演

研修会は、まず名古屋市博物館講堂にて勝田氏を中心に、杉浦氏との対話を挟んで、カメラの仕組みや撮影方法を、スクリーンに映し出しながらご講演いただいた。

文化財写真の撮影は、通常の撮影とは異なり、文化財資料の色や形状を正確に記録する事が何よりも求められる。そのため、最低限必要とされる撮影知識をレクチャーするというのが講演の主な目的であった。文化財写真で難しいのは色の再現であり、資料の色を出来る限り忠実に



講師 勝田徹氏

漆器、能面、版本、ジオラマ模型など様々な実例を挙げながら、照明を資料に反射させない方法や、資料の色に干渉しない背景色の組み合わせなど、様々な対応策を教えていただいた。また、一つの資料に対して、レンズ、ライティングの位置、背景色など、異なった環境で撮影した写真を比較しながら解説いただいたことで、参加者の理解がより深まった。また、一つの撮影方法が正しいのではなく、写真の使用目的に合わせて撮影環境を整える必要性も示された。

実践



撮影研修風景

研修会の後半では、名古屋市博物館の写真室に移動し、実践的な研修を行った。まず、カメラ、照明、撮影補助器具などの使用方法や配置、注意事項をご教示いただきながら、実際に資料を撮影した。次に写真現像について、パソコン上での修正加工方法をご教示いただいたが、修正を加えるほど、文化財資料の実像とはかけ離れていくため、撮影段階で環境を整え、加工する必要のない写真を撮影する重要性が述べられた。また撮影画像の保存は「jpeg データ」のみではなく、未現像状態のデータである「Raw データ」形式を同時に残す設定にする必要があることを伺った。今回の研修会では参加者が自身のデジタルカメラで、これらの設定を変更しながらレクチャーを受け、撮影ができたため、一層理解を深めた。

現在、経費などの面から文化財資料の撮影を学芸員自身が行っている館が増えてきているが、機材の性能、詳細な設定まで熟知して撮影している学芸員は限られているであろう。しかし、文化財写真は、写真の色などが現物と異なっていれば、その誤ったイメージが広めてしまうことになる。今回は、習熟した技術の重要さと必要性を改めて認識させられ、非常に意義ある研修会となった。

(徳川美術館 学芸員 薄田大輔)

教育・普及部門研修会 「価値を伝える重要性とは」

平成 28 年 2 月 4 日 (木) 愛知芸術文化センターにおいて広報に関する研修を開催した。ライズマーケティングオフィス株式会社の田中みのる氏を講師にお迎えし、「価値を伝える重要性とは」をテーマに、2 時間半の講演であった。

田中氏の話はまず、自身の郵便局員時代の体験談からはじまった。一般家庭を 1 件 1 件回って年賀状を販売する営業を勤めるも、全く成績が上がらず苦悩した田中氏は、誰から買っても同じ年賀状を自分から買ってもらえる工夫を行った。具体的には葉書を模したオリジナルの名刺を作り、自分を覚えてもらうというものであった。名刺は初対面の際にやりとりするものであり、自身を覚えてもらうための大事なツールである。一方で皆と同じ名刺では、折角のそのツールが“風景化”してしまう。風景化しない販促物を心がけることを田中氏は強く提唱した。



話の内容は次に、ホテル朝食での選べるスープの話に移った。聞き慣れない名前のおいしいスープ、スパイシーなスープ、おなじみのスープ。田中氏が会場に問いかけると、多くの人が「無難だから」という理由でおなじみのスープを選んだ。しかし田中氏がそれぞれのスープの特徴、どういう人にお勧めかという説明を付けると、最も選ばれなかったのがおなじみのスープで理由は「無難だから」。つまり理由も品質も全く変わらないのに、価値の伝え方ひとつでまったく逆の結果をもたらした。



こうした風景化や価値が十分に伝えられないということに陥らないために重要なこととして、「ターゲット像を明確にする」、「共感・共鳴のデザインを取り入れる」ということを挙げられた。伝えたい思いだけでなく、伝えたい相手はどのような人か、その人が求めていることは何かを考えることで、伝わる販促物になっていく。さらにその販促物に「驚き・発見」もしくは「承認・満足」という方向性の共感・共鳴のデザインを導入することで、伝える力を増すことができると説かれた。

内容は氏の体験や事例に基づくもので、直接は博物館と無関係のものであった。そのため「自分の博物館の事例に置き換えるとどうか」という変換作業を脳内で行いながら聞くわけだが、これが自館の課題と向き合うという意外な効果をもたらした。多くの館に共通する販促物はポスター・チラシであるが、それが果たして風景化していないか、本当に伝わるツールになっているか、常に再考を促された。

参加者は当初予定の定員を大きく上回る 80 人にのぼった。博物館の種類、規模の大小を問わない多様な館が集まったことは、効果的な広報が共通の課題であることを示しているように感じた。販促物の考え方を少し変えるだけで劇的な効果を生む可能性の道筋を示していただいた。2 時間半の長丁場であったが、軽妙な語り口、ウィットとユーモアに富んだ「田中みのるの劇場」に惹きつけられ続けた時間であった。

末筆ではあるが、講演をお引き受け下さった田中氏と、会場をご提供いただいた愛知芸術文化センターおよび愛知県美術館に御礼申し上げる次第である。



(岡崎市美術博物館 学芸員 湯谷翔悟)

表紙館のご紹介

■トヨタ博物館

【開館時間】

9:30 ～ 17:00

(入館受付は 16:30 まで)

【休館日】

月曜日(祝日の場合は翌日)

及び年末年始

【入館料】

大人 1,000 円

シルバー(65 歳以上) 500 円

中高生 600 円 小学生 400 円

【所在地】

〒480-1118 愛知県長久手市横道 41-100

代表: 0561-63-5151

ご見学・お問合せ専用: 0561-63-5155

URL: <http://www.toyota.co.jp/Museum/>

【駐車場】

乗用車 400 台 バス 24 台

【交通手段】

・名古屋瀬戸道路

長久手 I.C. より 0.4 km

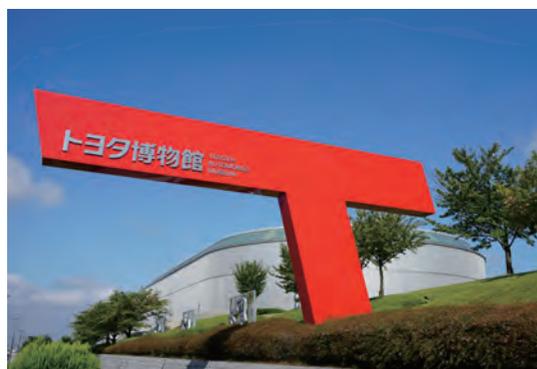
(東名高速道路 日進 JCT 経由)

・地下鉄東山線「藤が丘」駅より東部丘陵線

〈リニモ〉「芸大通駅(トヨタ博物館前)」下車

1 番出口より徒歩約 5 分

・名鉄バス「トヨタ博物館前」下車 徒歩 5 分



「愛知の博物館」 No.103

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489-0965

瀬戸市南山口町 234 番地

愛知県陶磁美術館内

TEL(0561)84-7474